「ひざ痛教室」 - 第４回 - 変形性ひざ関節症②

副院長の三上です。

第４回の「ひざ痛教室」です。よろしくお願いいたします。

今回も引き続き、中高年のひざの痛みの最大の原因である

“変形性ひざ関節症”についてお話します。

“変形性ひざ関節症”とは、加齢とともに、ひざの軟骨がすり減り、関節の変形が進み、この影響により炎症を起こし、痛みや水腫（水がたまる）などが生じる病気です。初期～中期では関節の間隔が狭くなり、末期（進行期）では軟骨がなくなり骨同士が直接ぶつかって痛みや変形が増します（図 1）。

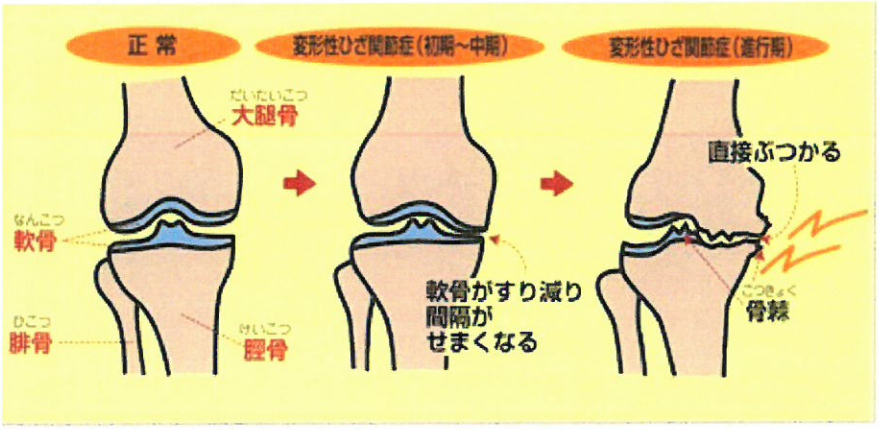

図 1

図 2 は、実際のひざの軟骨の写真です。左が正常、右が変形性ひざ関節症の末期で関節軟骨が凸凹になっています。

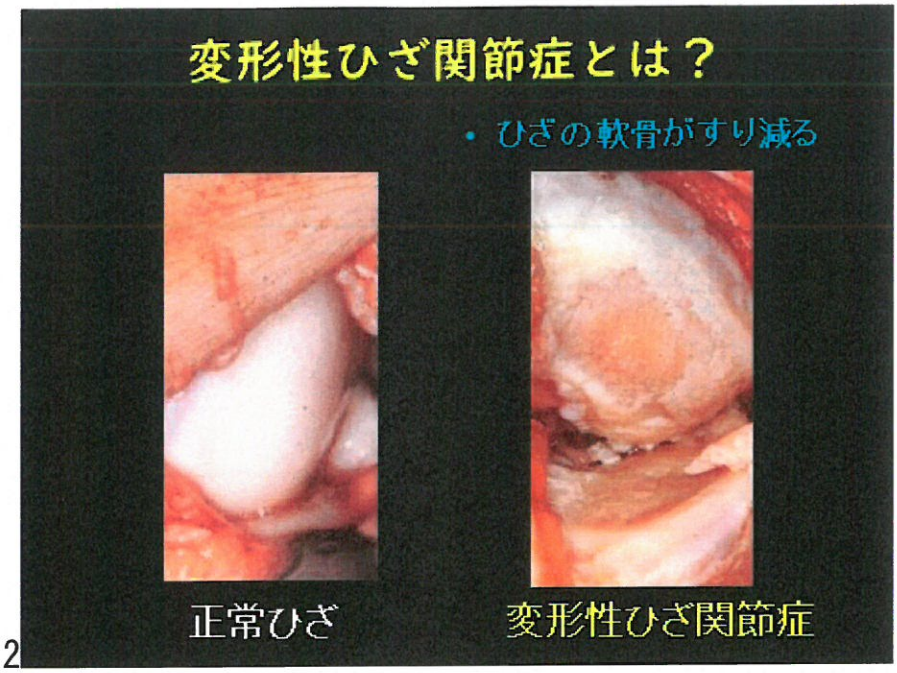

図 2

図 3 は、レントゲン写真です。左は若い正常な方のレントゲンで、関節のすきまが空いていますが、右の末期の変形性ひざ関節症の方では、関節のすきまがなくなり、骨同士がぶつかり、ひざの形が大きく変形しているのがわかります。

図 3

変形性ひざ関節症の患者さんは年齢とともに増加します。女性では40代で5人に一人、80代では5人に4人というように増えます（図4）。

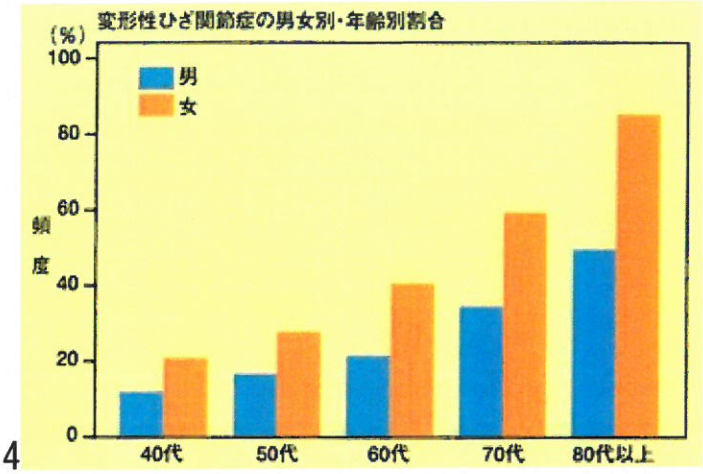

図4

日本人の変形性ひざ関節症の特徴についてです。日本人ではもともとの骨格が0脚の傾向があり、内側の軟骨に負担がかかりやすく、加齢ともに徐々に内側がすり減って0脚が進行する内側型というタイプが9割を占めるといわれています（図5）。

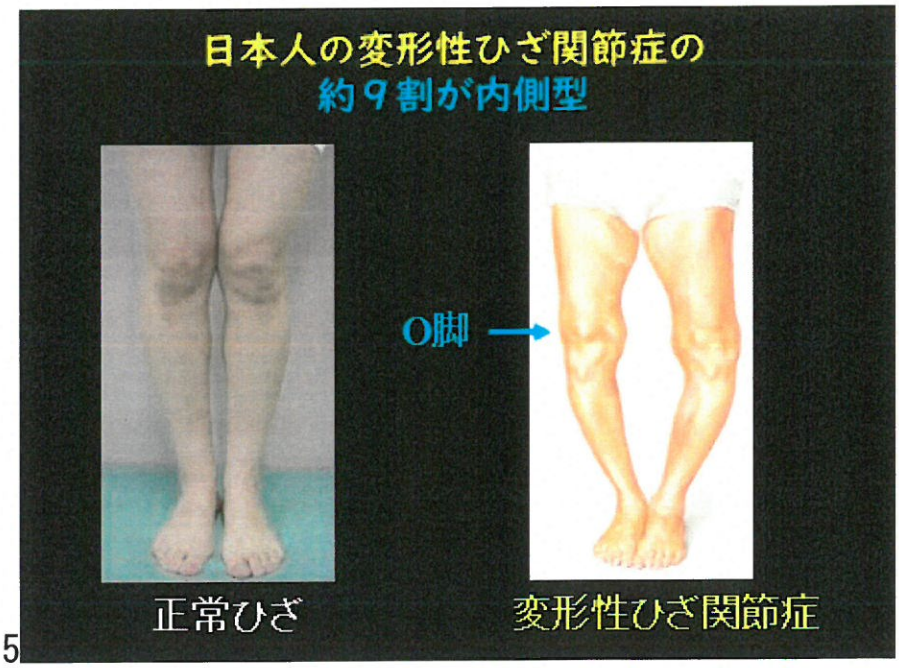

図5

まとめです。“変形性ひざ関節症”は、加齢とともに、ひざの軟骨がすり減り、関節の変形が進み、痛みなどが生じる病気です。末期になると関節軟骨が凸凹になり、レントゲンでは関節のすきまがなくなり、大きく変形してしまいます。加齢とともに患者数が増加します。日本人では内側がすり減って0脚となる内側型が9割を占めます。